

# 桃源郷異聞

吉岡省二

寂庵の玄関内に飾っていた揮毫、『桃源郷はここ』。見人を、ほつこりあたたかい気持ちにしてくれるその文字は、哲学者・梅原猛さんによるもの。この作品が寂庵に収まつたと聞いたご本人は、「お茶屋に買われなくてよかつた」とおっしゃったとか。納めたのは京都市内のZ画廊。当時の顛末を（寂聴さんもどこかに書かれていたよう思うが）、何かの因縁か、同画廊の店主から聞く機会に恵まれた。

トとのご縁をいただいている。関西への機会があれば立ち寄り、都内でアートフェアに呼んでもらつたり、推し作家の展覧会への旅をご一緒したり。そんな中、仕事で寂庵を訪ねた帰りに寄つたところ、それまでは全く知らなかつたのだが、店主が寂聴さんとは旧知の仲と聞き、思い出話をいろいろと伺えたのだった。

前述の梅原さんは、こちらの店主にとつて、その業界に立たせてくれた恩人のような方。店名のロゴも梅原さんがしたためたものだという。その字に惹かれた店主が、揮毫作品に仕立てるという閃きを得て、催した展覧会は大盛況。そこへ現れたのが、他ならぬ寂聴さんであった。

店内を一巡した寂聴さんが、最も気に入つて「買いたい！」とおっしゃつたのが冒頭の『桃源郷はここ』であつた。

したり顔の店主に促され、おもむろに名札を裏返した寂聴さんは絶句。そこには「瀬戸内様 売約済」とあつたのだ。

「うそ！ どうせ、全ての札に書き入れたに決まつてる！」

他也も裏返してみるものの、売約済とあつたのはその一点のみで、感服してお買い上げとなつた。

店主は当初、この作品を非売品にするつもりだつたらし  
いが、聞き入れてくれそうにないのが寂聴さん。事前に、  
「きつとこの作品」と予想し、書き込んでおいたのだといふ。

こんな逸話も聞いた（店主の思い出し怒りとともに）。

寂聴さんが古い仏画を入手され、その額装を「あなたの新しい感性で」「すべてお任せする」「一切文句は言わない」と、依頼されたという。しかし納品後、周囲数人から否定的な感想を聞いた寂聴さんが、深夜に何度もお怒りの電話をかけていらしたとか。

しかし、店主も負けてはいない。

「そんな素人の感想に流されて！ もつといろん人に聞いて、一年後もそんな声ばかりなら、また相談しましょ」と

無視したそうだ。

絶交して一年後、「久しぶり」と来店し、何事もなかつた  
ようにふるまう寂聴さんに、店主は

「私はまだ許してませんよ！ あんた、謝つてないし！」

と塩対応。

しかし、寂聴さんも負けてはいない。

「まあまあ、一緒に写真撮りましょ。これで、仲直り♪」

お人柄というか、流石である。

今年の早春、その画廊を訪ねたら、陳列窓に梅原さんの揮毫が飾られていた。

『福は内 鬼も内』

寂聴さん晩年の寂庵でも、そう唱えて豆を撒いたと聞く。店主が非売品として残しておいたものの、時季もよく、久しぶりに飾つたらしい。これまでの諸々は、きっと因縁尽? と思い、譲つていただいた。寂庵とは比較にもならない狭い拙宅だが、節分の頃には玄関に飾ろうと思う。出奔時に「大鬼になれ」と勘当され、見事な「大鬼」となられた寂聴さんの魂が、遊びに寄つてはくれまいと、厚かましく期待していることは、私一人の秘密である。